

Newsletter

2006. Jan. No. 7

「教養」のグローバル・スタンダード

教養研究センター副所長 岩波 敦子



「教養」ということばは「時代」を映し出す鏡である。時を超え、「教養」ということばのもと、高等教育の場で何が実践されてきたのかを振り返ると、玉虫色に変化するその姿に驚き、戸惑う。そして「教養」とは、ある特定の分野から成り立つ普遍的固定概念ではなくて、時代・文化に規定され、その構成要素を常に変えながら、新たなネットワークを形成する改編可能な知の集合体である事実を再認識する。

欧米の「教養教育」を意味する liberal arts ということばは、ラテン語の artes liberales に由来する。Freie Künste というドイツ語訳からもわかるように、「教養教育」とは、技・技芸を教える学問であり、その意味で実学そのものといえる。

「教養」とは知識の習得ではないといいつながら、最低限の知識がなければ語れない。知識があってもそれらを統合する知的能力がなければ、宝の持ち腐れ、どこかにしまい忘れた宝はいざというときに出てこない。得た順番に知識をしまうのでは役に立たず、適切な引き出しにそれらを振り分け、ラベリングし、ときど

き引き出しから引っ張り出しては虫干しし、もう一度振り分ける。知識の習得と知的統合力の養成には時間も手間もかかる。この地道な作業を黙々とこなしながら、そのスキルを身につけていく。もし国際的に通用する「教養」というものが存在するならば、その神髄は、自分が持っている知識を総動員し、経験を通じて組み立てていく喜びを実感し、その体験から新たな地平を切り拓く能力を獲得することにあるだろう。

そのような体験を教育の場で実現していくためには、現在私たちが実践している「教養教育」の実態を十分に把握する作業が不可欠である。各人の理解の相違を前提にした「教養」ということばだけを独り歩きさせることなく、高等教育で獲得する知的創造力とは何たるかを自覚し、目指しているものを共有する。その作業は、常に時代とのキャッチボールの中で行われなければならない。「教養教育」とは、光を当てる角度によって輝きを変える原石を、磨き上げる作業の積み重ねなのかもしれない。

CONTENTS

「教養」のグローバル・スタンダード 岩波 敦子	1
活動報告	2
トピックス	8
インフォメーション	10
事務局だより	10

基盤研究『慶應義塾大学の 教育カリキュラム研究』

研究の目的——教養教育の再検討、慶應義塾大学のカリキュラム検証と提言

この研究は、大学の環境が変化するなかで、大学が次代に伝えていくべき知の体系および教養のあり方を再検討するとともに、現在慶應義塾大学で行われている教育カリキュラムのあり方を検証しています。その上で、今後あるべき大学カリキュラムに関する提言を行うことを目指しています。

創立150年を迎える慶應義塾——未来を先導する教養教育の確立に向けて

この研究は、これまで行われたふたつの研究を引き継いでいます。ひとつは、教養研究センター立ち上げ理念の基礎となった『教養教育グランドデザイン』（文科省委託研究、2002年）、もうひとつは教養研究センター基盤研究『日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点』（報告書、2005年）です。前者は、教養教育に関する理想型を構想した理念型研究であり、後者は、総合教育科目の研究とその現状改善を目指した提言書でした。昨年5月から進めている基盤研究「カリキュラム研究」は、その次の段階として、現在行われている教育をさらに広く深い視点から検証し、現実と理想をさらに整合させるための指針の作成、および具体的提言を目指して展開されています。

慶應義塾は創立150年に向けて、大学学部教育の質的強化を図る指針を出しています。教養研究センターで培われた知見がそのために生かされるように、質の高い研究を提示し、現在のディグリー制度の再検討と再構築も視野に入れた提言を行い、かつそのためのチャートを示すことも目指しています。

活動内容

毎月1回、次のような講演会・勉強会を企画し、現代の大学教育を巡る問題の論点整理を行っています。

●主な活動の経過

2005.7.4 特別公開対談 遠山敦子元文部科学大臣、安西祐一郎塾長「教養教育の将来を見据えて——次世代に何をどう伝えるか——」

2005.7.23～24 講演会 出口雅久（立命館大学法学部教授）「大学カリキュラムにおける国際教育——専門教育と語学教育の融合の問題」；大西直樹（国際基督教大学教授）「大学カリキュラムにおける履修登録制度とGPA制度——大学教育の質を確保するための戦略」

2005.10.15 講演会 米澤彰純（大学評価・学位授与機構評価研究部助教授）「大学評価と質保証政策の国際的動向」；高橋義人（京都大学大学院・人間・環境学研究科教授）「国立大学改革と今後の大学教育——京都大学を例として」

2005.11.15 研究会 境一三（外国語教育研究センター副



所長）「慶應義塾大学における外国語教育の現状と改革の展望について」

2005.12.3 研究会 坂本光（文学部助教授）「能力別クラス編成とプレースメント・テストについて」；小宮英敏（商学部教授）「商学部における数学のクラス編成について」；小尾晋之介（国際センター所長）「慶應義塾における国際連携プログラムの展開シナリオ」

●今後の予定

2006.1. 勉強会「アメリカのリベラル・アーツ教育カリキュラムについて」、「学生の授業・カリキュラム評価について」

2006.2. 勉強会「成績評価方法の現状と課題」、「専攻、副専攻、セミナー、少人数セミナーについて」

今後は来年度に向けて、慶應義塾大学の教育カリキュラムの分析をさらに進めていくとともに、そこで得られたデータをもとに、さらに学生の動向の調査等を行い、将来のカリキュラムに関する提言をまとめていく予定です。

なお、この研究会は、塾内の教員には常に公開で行っています。これまでの活動経過・記録、今後の予定等の情報は、<http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/kiban1/>で公開していません（塾内からのみアクセス可）。

（カリキュラム研究幹事／佐藤 望）

基盤研究『身体知プロジェクト』

基盤研究の2本の柱のひとつ、『身体知プロジェクト』は、2006年度の秋に身体知教育の実験授業を立ち上げるべく、2005年4月から月例研究会を重ねています。2005年11月まではメンバー各自にとっての身体知観、および身体知教育の必要性とその理念について意見を交換し合い、同時に心と身体の「気づき」のための専門家によるワークショップを受けることにより、議論と実践を重ねながら、身体知の意義と教育の中での位置づけを探ってきました。そして2005年12月からいよいよメンバー各自がアイデアを持ち寄り、実験授業の構築を開始しました。コースの根本にある理念は、「自分の殻を破る」です。慶應義塾大学では現在、音楽、体育、演劇、美術などいわゆる理念と体験を合致させた授業や、自然科学系の体験的な実験授業が学生に提供され、大学の学生支援組織も学生のキャンパス体験に寄与しています。また実際に学生たちに芸術を通じた身体知の現場を見せ、続いて学生自らに企画・実践させるHAPP (Hiyoshi Art and Performance Project)、アート・センター、そしてそれらのコンテンツをアーカイブ化する組織と人材も整いつつありま



す。これらのネットワークに心理学や感情社会学などの研究内容を反映させ、既存のコースにはない理論と実践を交えた「気づき」の場を提供することが、2006年度秋開講予定の身体知実験授業の目標です。そのためには、教える側の意識改革も必要でしょう。『身体知プロジェクト』ではおよそ10名の教職員メンバーが活動していますが、研究会は常に慶應義塾の教職員に開かれています。2006年度春には、学生だけでなく、教職員にも、座学とは一線を画す身体知の重要性を理解していただくために、話し合いとワークショップをかねたミーティングの開催を予定しています。一人でも多くの方の参加を期待しています。

(身体知プロジェクト研究代表／横山千晶)

学術フロンティア 超表象デジタル研究

——表象文化に関する融合研究に基づく
リベラル・アーツ教育モデル構築——

学術フロンティア「超表象デジタル研究」プロジェクトは、平成12年度から16年度にかけて行われた学術フロンティア・超表象デジタル研究センター「表象文化に関する融合研究」の成果を土台として、新たなリベラル・アーツ（教養）教育のメタ理論とその理論に基づくモデル構築を目的とした3年計画の研究活動です。

12月に開催されたHiyoshi Research Portfolioでもポスターやシンポジウムを通して紹介させていただきましたが、多様なケース・スタディを展開することでデータ蓄積に主軸を置いた前プロジェクトに対して、本プロジェクトでは、こうした蓄積を活かしつつ、統合的なメタ理論とモデルを作り上げるための集中的・集約的な研究テーマを設定し、その実現を支える態勢を敷いています。

研究テーマは、新しいリベラル・アーツ（教養）教育を構成する理論・内容・場とそれを発信するための環境整備の四点に焦点を絞っています。具体的には以下のとおりです。①「メタ理論とモデル構築」研究——メタ理論とそのモデルを構築し、これを「21世紀型キャンパス基本構想」としてまとめあげる。

②「学びの形態」研究——カリキュラム・モデルとして、導入教育、「温故知新」型教育、「身体知」教育、「現代における危機的問題」教育のプログラムの開発と実験を行う。

③「学びの場」研究——新たなリベラル・アーツ教育展開の場としてキャンパスの開放や拡張など、キャンパス自体の見直しや再構成、創生についての可能性を探る。

④「超表象デジタル」研究——成果のアーカイブ化はもとより、研究活動の円滑な進展を支えるための多彩な機能を持ったプラットフォーム構築の研究と実践を行う。

研究組織は、活動全体に責任を負う「統合研究ボード」を中心として「コンテンツ研究ユニット」、「学習環境構築研究ユニット」、「超表象デジタル化研究ユニット」から構成され、国内外の共同研究機関との連携もすでに順調に進みつつあります。

今年度は、統合研究ボードの提示した研究の全体計画案に基づいて、各研究ユニットにおける詳細な研究計画の立案と基礎的な調査、関係者との打ち合わせを行っているところです。研究活動の進展状況や中間的な成果についても可能な範囲で積極的かつ迅速に公開することでご意見やご批判を仰ぎたいと考えております。また、研究活動へのご協力を皆様をお願いする機会も出てくるかと思います。

本プロジェクトへのご理解とご支援、ご協力をお願いする次第です。

(学術フロンティア研究代表／羽田 功)

極東証券寄附講座

極東証券からの寄附により、本年度も以下のふたつの講座を教養研究センターで設置・運営しています。ともに昨年度立ち上げた講座ですが、2年目を迎えて軌道に乗ってきたと言えるでしょう。

「生命の教養学」

今年度2年目を迎えるオムニバス講座「生命の教養学」。その目的は、生命の時代と呼ばれる21世紀を迎えて、それにふさわしい先端科学の知識を学ぶとともに、生命科学を適切に応用するために必須の、生命をめぐる幅広い領域横断的な知を履修者に習得させようというものです。2005年度は、武藤浩史（法学部）、石原あえか（商学部）、鈴木伸一（医学部）の3名の教員がコーディネーターとなり、自然科学の最先端の研究紹介から生命をめぐる芸術・宗教・社会活動に至るまで、養老孟司氏、河本英夫氏、斎藤環氏ら第一線で活躍する講師陣を招いて、前期13回の授業を行いました。6月23日には安西祐一郎塾長を迎え、「生命と認知」というテーマで、講義のみならず、コーディネーターや受講学生との間で活発な質疑応答が行われました。受講希望が多数になったため、選抜を行い、114名に絞りました。

（武藤浩史）

「アカデミック・スキルズ」

2003年度に実験授業として始まり、翌2004年度にセンター設置科目となった「スタディ・スキルズ」は、今年度、名称を「アカデミック・スキルズ」と改め、開講数も月曜日、水曜日、木曜日の3コマに増加しました。この講座はスタディ・スキルズの精神を引き継ぎ、学生に「教養」という知的基礎体力をつけさせ、「自ら考え、調べ、論ずること」を目的としています。そのために月曜日と木曜日の授業は春学期に開講されていた「生命の教養学」と、水曜日は「身体／感覚文



2005年度 生命の教養学

「生命と自己——今、『自分』が、『生きていける』、とは？」

講義日	担当者	演題	コーディネーター
4月14日	ガイダンス		
4月21日	養老孟司 北里大学教授	生命と脳と自己	武藤浩史
4月28日	河本英夫 東洋大学教授	生命の自己制作 (オートポイエシス)	武藤浩史
5月12日	中島陽子 文学部教授	生物学的自己——遺伝子/神経系・内分泌系・免疫系	武藤浩史
5月19日	秋田光彦 大連寺住職	アート・いのち・仏教	熊倉敬聡
5月26日	斎藤環 精神科医師	生命と表現——リアルとは何か——	熊倉敬聡
6月2日	安藤寿康 文学部教授	心も遺伝的である	石原あえか
6月9日	石原あえか 商学部助教授	自然研究者としてのゲーテ 近代ドイツ文学と科学	石原あえか
6月16日	椿昇 京都造形芸術大学教授	アパルトヘイト・ウォールとパレスチナ——傍観者から当事者へ——	熊倉敬聡
6月23日	安西祐一郎 塾長	生命と認知	武藤浩史
6月30日	池内了 早稲田大学国際教養学部教授	宇宙における生命	石原あえか
7月7日	前野隆司 理工学部助教授	ヒトとロボットの心	熊倉敬聡
7月14日	まとめ		

化」と抱き合わせとなっていて、最終的には学生はこの二つの講座から自分たちに興味のあるテーマを見つけ、それについてプレゼンテーションを行い、レポートを作成することになります。この目標に到達するために、まず春学期はレポート作成の基本を中心に授業が展開されました。学生はノートテイキング、クリティカル・リーディング、資料検索と整理の方法などの基本を身につけ、その上で学生自身が実際にテーマを見つけ、アウトラインを作成し、そしてレポートを作成・提出するという実践しました。秋学期は、まずプレゼンテーションの基本を習得させます。学生をいくつかの小グループに分け、そこで新たにテーマを見つけさせ、学生同士で議論を重ねさせ、プレゼンテーションを行わせました。レポートの作成とプレゼンテーションの基本を学習した学生は、今度はそのふたつをさらに確固としたものにするため、ひとりひとりが前記のふたつの講座からテーマを見つけ、論を構築し、それを個人でプレゼンテーションし、レポートにまとめることとなります。こうした学生の成果は、2006年2月8日に実施される月・水・木曜日の3クラス合同の発表会で披露されます。また学生が秋学期に提出したレポートは昨年同様、論文集という形でまとめ、出版される予定です。

（大出 敦）

第7回シンポジウム

「日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点
——将来への提言を含めて」

このシンポジウムは、2003～2004年度基盤研究の成果報告会として2005年7月16日に実施されました。司会は、田上竜也・教養研究センター副所長が担当し、基調報告は、研究報告のとりまとめも行った納富信留（文学部、哲学）、種村和史（商学部、中国語）、佐藤望（商学部、音楽学）が行いました。基調報告ではそれぞれ報告書の骨子について説明したあと、今後の日吉における総合教育科目および少人数セミナーに関して、よりよい教育展開を行う可能性について話し合いました。とくに、今回はディスカッサントとして、黒田昌裕・前学事担当常任理事（現内閣府経済社会総合研究所所長）、西村太良・学事担当常任理事、朝吹亮二・法学部日吉主任の出席を得て、日吉における総合教育科目の科目設置に関する歴史的経緯や、専門教育と一般教育の関わりの問題、講義要綱の問題、科目の体系化に関する今後の改善の可能性について、さまざまな観点からディスカッションを行いました。その結果が、今後各学部におけるカリキュラムの改善に生かされることを期待したいと思います。



なお、シンポジウムの結果は、教養研究センターシンポジウム7『日吉設置学部共通総合教育科目の現状と問題点——将来への提言を含めて』として公表されていますので、ご覧ください。

（佐藤 望）

ゲーテの『ファウスト』と脳内人工操作 21世紀における新人類「ホムンクルス」

本講演会は、現代ドイツを代表する知識人で法学博士のマンフレート・オステン氏（前アレクサンダー・フォン・フンボルト財団事務総長）が、「日本におけるドイツ年」関連行事での来日を機に、自ら希望され、実現しました。2005年11月1日17時から2時間余、来往舎シンポジウムスペースで、約70名の出席者が氏のドイツ語に熱心に耳を傾けました。なお、ドイツ語の知識がない方のためには、講演中は翻訳を字幕スクリーンに投影し、質疑応答には逐次通訳をつける配慮をしました。

演題は、ドイツの文豪・ゲーテの難解な悲劇『ファウスト』第二部に登場する人造人間・ホムンクルスについて。ちなみにいま、ドイツでクローンや遺伝子操作を問題にすると、『ファウスト』がよく引用されます。ゲーテという詩人のイメージが強いのですが、彼はザクセン・ワイマール公国に仕えた高級官僚であり、また自然研究者としても業績を残しています。黎明期の脳研究にも通暁していたゲーテは、人間の「性急さ」を時代の「最大の病」と見なしていました。さらに1829年、化学者Fr.ヴェーラーがそれまで不可能と考えられていた有機物（この場合は尿素）の人工合成に成功すると、ゲーテはホムンクルス誕生シーンを全面的に書き改め、



人間の「短気」と「好奇心」の結晶である小さな人造人間を、プラスコから出すことなく、古代ギリシアの神々が支配する太古の海に還しました。「現代はすべてが《悪魔的速度》で進んでいく」と嘆いたゲーテは、ホムンクルスを人類の脳欠陥である「性急さ」から遠ざけるべく、徹底的なスピード・ダウンのプロセスに組み込んだのでした。

ゲーテの先見性と現代科学倫理の問題をたっぴりと魅力的に語ってくれたオステン氏の講演後は、引き続き活発な質疑応答が交わされました。

（石原あえか）

FDを考える 6

「構造的教授法」テーマ発見と書く能力
——ドイツ・ケルン大学ライティングセンターの挑戦——

教養研究センターが設置するアカデミック・スキルズ(2004年度はスタディ・スキルズ)をはじめとして、各学部においても少人数セミナー形式の授業が多く展開されるようになってきました。これらの少人数セミナーでは多くの場合、レポートの提出やプレゼンテーションが課題となります。しかし、テーマ発見から最終的なレポート・論文の作成に至るまでのプロセスを、学生が正しく理解して学習を進めることの難しさは、日本のみならず各国の大学においても問題となっています。欧米の大学や、昨年度教養研究センターが調査訪問した韓国のソウル大学ではこの問題に対応するためにライティング・ラボ等が設置されています。

今回、ドイツ・ケルン大学ライティングセンター所長のヘルガ・エッセルボルン博士が訪日された機会に、教養研究センターでは表題のライティングスキルに関するセミナーを2005年11月10日に開催することができました。エッセルボルン博士は、テーマ発見時における問題の解決法から、レポートを書く際の資料の選択法、論文骨子の作成法にはじまり、教える教師側がどのように学生の問題に対処していけばよいかについて構造的・論理的な展開で説明をされました。



今回のセミナーの内容については、「FDレポート」の形ではなく、「CLA-アーカイブズ」としてより詳しい内容が分かる形で皆さんのお手元に届ける予定です。

(近藤明彦)

「敵か味方が——ロボットをめぐる文化」

2005年11月11日18時15分からJ14番教室において、上記公開セミナーが開催されました。ゲスト講演者は、日本学術振興会・海外招聘研究者短期プログラムを利用し、11月中、日吉に滞在されたケルン大学哲学部教授ハンス・エッセルボルン氏。最初に氏が約40分、アシモフのロボット工学三原則と彼のロボット短編集を手がかりに、『コンピューターとロボットに敵意が生じるか?』というテーマで独文学者としての視点から講演しました(原題*Können Roboter und Computer böse sein?* 翻訳字幕スクリーン付)。H.W. フランケやH. ハウザーなどドイツSF作品も紹介しつつ、SF文学に仮託された問題、すなわち機械による職務遂行・論理的計算の枠組みの中におかれている人間存在について考察しました。

続いて巽孝之氏(文学部)が、SF作家・柴野拓美による「SFとは人間理性の産物が人間理性の制御を離れて自走することを意識した文学である」という定義を紹介。巽氏は、英米文学者の視点から、W. ギブスンらポスト・ヒューマニズム思想と連動したSFでは、むしろ人間こそ「肉人形」=ロボットとする逆転描写が行われたこと、またE. トムソンの



『ヴァーチャル・ガール』やG. イーガンの『ディアスポラ』等、新傾向の現代SF作品を紹介し、エッセルボルン氏の講演内容を補足しました。さらに、前野隆司氏(理工学部)がロボット工学者の視点から、「人の意識は解明可能か」「ロボットの意識は作れるか」という最新トピックについてミニ・レクチャーを行いました。

「慶應におけるドイツ年」の一環として行われた本セミナーですが、英米文学や工学分野からも参加者を得て、日独文学研究比較に留まらない、領域横断的でユニークなものとなりました。2007年には横浜でアジア初の世界SF大会開催が決定した矢先でもあり、本テーマについては今後も活発な研究交流が期待されます。

(石原あえか)

秋学期のHAPPの活動

2005年度秋学期において教養研究センター日吉行事企画委員会（以下HAPP）は、春学期中に公募、採択を決定した企画の実行を核として活動を行ってきました。

今年度採択された公募企画は、学生企画が3つ、教員企画が1つ、教職員共同の企画が1つの計5つでした。それぞれの企画には異なった趣向が見られ、複数のイベントに足を運んだという方も多かったようです。すべての催し物は、昨年同様大きな成功を収め、地域住民を含む、とても多くの方々に参加していただきました。HAPPの公募企画は、日吉キャンパスを開かれた大学にしていくということに確実に貢献しています。

今年度秋の公募企画の最初は、『ママ・カクマ——難民キャンプから聞こえる詩』と題された教員企画でした。ここでは、ケニアのカクマ難民キャンプが紹介され、そしてその難民が創作した詩が演劇仕立てで朗読されました。彼らの詩には、何気なく平和に暮らしているわれわれに衝撃を与え、改めてわれわれがいかにかまれているのかということに認識させられました。ふたつ目の催し物は、展示と講演会という内容を持つ、教職員共同で企画された、『日吉図書館開館20年——建築家“榎文彦”と慶應義塾の建築物』でした。ここでは、日吉メディアセンターの設計を行った建築家榎文彦氏による講演会が開かれただけでなく、来往舎ギャラリーでは榎氏による慶應義塾の建築物の紹介が、大パネル写真が用いられて紹介されました。

3つ目と4つ目の企画は、学生によって企画された演劇公演でした。まずは、シェークスピア原作の『夏の夜の夢』で、現代風のアレンジが見られた恋愛喜劇でした。来往舎イベントスペースがフルに活用され、外の空間までもが統合的に用いられた意欲的なイベントでした。もうひとつの演劇公演は、慶應義塾大学文学部と深いかかわりを持っていた永井荷風の戯曲『異郷の恋』の初演でした。この戯曲がHAPP主催の企画として初演されたということは、注目に値することです。また、永井荷風の文体は、現代のわれわれにとって理解しにくいものですが、企画責任者の学生がオリジナルを損なうことなく脚色を加えていました。

最後の企画は、3年連続で採択されたマジックショーです。この企画責任者はこれまで、『色即是空』、そしてその“続編”であった『色即是空2 CON-TRUST』を成功させてきました。これらは、マジック、ジャグリング等が含まれた総合エンターテインメントショーでしたが、今年度は、マジックのみに焦点が当てられ、しかもこれまでは来往舎イベントテラスという大きなスペースで行われてきたのを、来往舎シンポジウムスペースというあえて狭い空間で企画が催され、来場者は、マジックの醍醐味を堪能していました。

上記すべての公募企画にはHAPPから補助金が支給され、HAPPの監督下で企画が実行されました。各企画の実行者は、綿密な企画・計画書を作成し、企画終了時においては、来場していただいた方々の声を反映した報告書を作成することが義務付けられています。秋の企画についての詳細は、HAPPのホームページ（<http://www.hc.cc.keio.ac.jp/happ/>）で見ることができます。

（石井 明）

開かれゆくキャンパス3

学生フォーラム
「感動の大学をめざして——Yes, We Can Do!」

2008年に慶應義塾大学が創立150年を迎えるに当たり、議論をもとにしたさまざまな改革が進んでいます。しかし、新しい動きの中では学生も大きな原動力となっていく必要があります。大学という空間に身を置いている学生が、そこで「学ぶ」、「生活する」ということはどういうことか。さまざまな学部で属する学生たちが真剣にそのような自らのアイデンティティを見直し、意見を交換し、自らの経験を通して慶應の将来像を提示することが大学を動かす原動力のひとつです。

その第一歩として、2005年12月17日に「感動の大学をめざして」をテーマに、教養研究センター・開かれゆくキャンパス3として学生と教職員が一同に会しました。羽田功教養研究センター初代所長の基調講演に始まり、西村太良学務担当理事、安西祐一郎塾長が、慶應義塾大学の「制度」「環境」「教育」を核に据えた学生の発表を受け、レスポンスを行い、続いて学生と教職員が同じ土俵で密なディスカッションを展開しました。

このフォーラムのいまひとつの目的は、「開かれゆくキャンパス」シリーズの一環として企画と進行をすべて学生自身が行うということです。今回の学生企画を推進したのは、教養研究センター設置科目「アカデミック・スキルズ」（2004年度まで「スタディ・スキルズ」）を履修した、あるいは現在履修している学生が中心となっている「教養教育研究会」のメンバーです。つまりこのフォーラムは学生たちが、自らのアカデミック・スキルズを使って調査したことを発信する場であり、自らをほかの人々とコネクトしていく方法を学ぶ場でもあります。各テーマのリサーチ班の調査や話し合いはもとより、企画書を作り、講演者とディスカッションを決め、依頼書を提出し、フォーラム参加者とのコミュニケーションを図っていく過程そのものが学びの場です。キャンパスで学ぶこと、生活することは、小さな「感動」の積み重ねであるべきです。人々が交流しあうことでその積み重ねが大きな感動につながる。この共通意識のもとで、学生間、教職員間、教職員と学生間の認識を確認し、またそのすれをあげりだし、よいところは互いに伸ばしあい、ギャップを埋めていく作業はこれからも行われていくことでしょう。

（横山千晶）

開かれゆくキャンパス4

21世紀の商店街Ⅱ

2005年12月20日16時30分から、来往舎シンポジウムスペースにおいてシンポジウム「開かれゆくキャンパス4：21世紀の商店街Ⅱ」が開催されました。HRP (Hiyoshi Research Portfolio) 2005の一環として、日吉での研究教育活動を公開するという趣旨も兼ねて行われたものです。

第1回シンポジウム(2005年1月18日)と同様、今回も2部構成での実施となりました。第1部は「学生の視点と発想による地域活性化への提言」と題された学生発表に充てられ、商学部設置総合教育セミナー「21世紀の商店街」受講者の代表学生数名が、日吉や横浜、あるいは日本各地の商店街に関する事例研究や、「ヒヨシエイジ」などを通じて地域活性化にかかわった経験について発表しました。

第2部では「大学・地域・行政の連携——その現状と課題」というテーマでのパネルディスカッションが、牛島利明商学部助教授の司会により行われました。最初に商店街、行政、研究者を代表する3人のパネリスト〔中野勝久氏(モトスミ・オズ通り商店街振興組合副理事長・事業部長)、富岡淳氏(港北区区政推進課企画調整係長)、宮木いっぺい



氏(法政大学地域研究センター専担助教授、GNC(Global Network for Coexistence)代表))による発表があり、その後質疑応答が交わされました。

特に行政からは、地域貢献に対する慶應義塾の取り組みに対していくつか注文が出されるなど、今後の大学と地域との連携のありかたを再考する契機となるシンポジウムでした。

(田上竜也)

Topics

トピックス

2005年度日吉予算管理部門内調整費 「新しい教養授業の支援」採択事業

第2次の採択結果

2005年度当初の事業の後をうけ、第2次の公募として日吉予算管理部門内調整費のうち「新しい教養授業の支援」部門の予算枠およそ1000万円の中から、日吉キャンパスとして新しい教養教育の授業開発・実施およびこれに関わる作業・成果の発信あるいは既存の授業の改善などを目的とする事業を公募し、効果の期待できる事業に対して支援を行うこととなりました。

日吉キャンパス専任教職員にむけて公募を行ったところ、13件(総額 13,114,672円 内訳:200万円程度5件、100万円以下8件)の応募申請がありました。教養研究センターは、この応募(第1次・第2次)に関与しない研究企画ボードのメンバーによる選考委員会を組織し、同委員会による厳正な審査の結果、次のとおり「新しい教養授業の支援」事業を採択しました。

採択数 3件(総額 1,367,432円)

事業代表者	事業題目	採択金額
森吉 直子	新しい教養授業～自己演出から学ぶ心体知～表現力のレッスン	¥440,037
石手 靖	日韓共同スポーツ文化交流を通じた教養教育の実践	¥601,220
小町谷尚子	文部科学省検定済高校教科書(英語)のデータベース化	¥326,175

報告会

そして、2005年12月3日(土)10時より、慶應義塾大学来往舎101・102にて成果報告会が開催されました。16件(第1次採択13件、第2次採択3件)の事業代表者による報告がそれぞれなされました。今回の報告会で特に顕著だったのは、学びの場が教室という箱を越えて、さまざまな場所で展開されているという事実です。遠隔授業やE-ラーニングのサポートに加え、その言語を母国語とする地域で他の外国人と共に学ぶという実地経験を交える言語教育の試み、講義で学んだことをさらに実体験させる展示会、理論を実際の演奏に繋げる音楽教育の試み、キャンパスを街中や電波の行き交う空間そのものに求め、既存の教育のあり方を見据える試みなど、それぞれ教育内容は違えども、場所と人という教育の基盤は同じであるという感を参加者全員が共有しました。キャンパスの内と外を、空間と人を通してどうつなげていくか、という課題はこれからの日吉のカリキュラムの基調となっていくことでしょう。

日吉キャンパス公開講座

2005年度慶應義塾大学日吉キャンパス公開講座は、テーマとして「創作とメディア」を掲げ、2005年10月1日から12月3日までの毎週土曜日3、4時限目、計10回実施されました。申し込み数は239名で、毎回の出席率は80パーセント前後。今回も大変熱心な参加者に恵まれました。

「映画におけるラテンアメリカのイメージ」（石井康史・経・助教授）にはじまり、「ハリウッド映画に見るアラブの表象」（村上由見子・文・非常勤講師）で終わりましたが、米・仏・日本映画に見られるラテンアメリカ像のステレオタイプ、アメリカのアラブ政策（イスラエル問題も含む）の歴史を見直す試みが見事になされました。

テレビ・メディアに関しては、「構成とは何か——情報化時代の映像論理」（丸山俊一・NHKチーフプロデューサー）で、番組はディレクター主導なのか、それとも視聴者集団で作るのか、という仮説のもとで、編集や物語の解体のことを「英語でしゃべらナイト」を例に話されました。「視えない媒体〈電波〉——ラジオとドイツ人」（識名章喜・商・教授）では、電波というメディアの歴史を概括したあとで、ドイツの大衆小説が扱ったラジオ小説に及びました。

「スポーツとメディア」（青島健太・スポーツキャスター）では、メジャーリーグと日本のプロ野球の違いを、テレビ解説などに注目しながら、「ストライク」の意味を中心に攻撃性と守備重視の対比にあると熱く語られました。また「一流アスリートとメディア」（田中ウルヴェ京・元シンクロナイズドスイミング五輪選手）では、アスリートのメディア活用のあり方を①win-winの関係、②共感力、③自己認識能力、というキーワードで示されました。

「メディアと政治」（河野太郎・衆議院議員）では、さまざまな政治的問題を詳しいデータをもとに示し、それらをメ

ディアがどう取り上げるかの重要性がわかりやすく解説されていました。

美術や芸術とメディアに関しては、「アロイス・ツェトル——動物譜の復活」（宮川尚理・理工・助教授）や「シュルレアリスムのメディア」（朝吹亮二・法・教授）が、19～20世紀におけるメディア＝霊媒のあり方が豊富な資料で描写されました。また、「禅と私の創作活動」（栞野俊明・徳雄山建功寺住職）では、日本の庭園と欧米の庭園を同時に映写し、比較検討しつつ、禅による美意識を解説され、自らの作品を提示されました。

文学では、「森鷗外のメディア感覚と創作」（井戸田総一郎・明治大学・文・教授）で鷗外の戯曲翻訳を中心にメディア感覚が述べられ、「古典の想像力、現代の創造力——過去を現代によみがえらせる「メディア」」（横山千晶・法・教授）でシェイクスピア「ロミオとジュリエット」という古典的な作品が、現代の三つの映画に読み変えられ、時代を超えて生き返っているかが示されました。「メディアとしての文学・音楽・映画そして映像と音響の融合」（小淵昭夫・経・教授）では、ギリシア悲劇や聖書が19・20世紀のさまざまなメディア芸術にいかにか活かされたかを示しました。

「メディアとしての「脱芸術」——「芸術」（から）の三段階を考える」（熊倉敬聡・理工・教授）では、近代的システムから逸脱するさまざまな行為とリンクする脱芸術のあり方が示されました。また「デジタル化時代の音楽とメディア」（佐藤望・商・助教授）では、現在起こっている音楽著作権問題を念頭に入れながら、芸術とは何か、芸術作品とは何かが歴史的に理論的に解明されました。そして「電子メディアの言語状況」（井上逸兵・法・教授）では、現在起きているコミュニケーション革命のなかでの言語現象を交通整理していました。

今回のテーマは、極めて今日的なテーマであり、未来を予測する指標になり得る講座だったと言えるでしょう。

（小淵昭夫）

2005年度 第1回運営委員会報告

2005年10月14日、来往舎大会議室において2005年度第1回センター運営委員会が開催されました。

はじめに、8月に『2004年度活動報告書』が刊行されたことが報告され、続いて、研究企画ボード、調査・研究セクション、交流・連携セクション、広報・発信セクション、日吉行事企画委員会、極東証券寄附講座運営委員会、日吉キャンパス公開講座運営委員会から定例報告がありました。

引き続き審議事項に移り、2005年度以降にセンターで行われる主な研究の方針が説明され、承認されました。その

うち基盤研究は「慶應義塾大学の教育カリキュラム研究」と「身体知プロジェクト」から成り、前者では教養教育をめぐる問題の論点整理、教養教育の検証と現状分析を進めており、後者ではさまざまな身体知のあり方と実践について調査し、それを基に身体知教育の意義と方法を探り、理論化することを目指しています。また、特定研究においては、過去5年間の「学術フロンティア研究プロジェクト」の研究成果と課題を出発点として、教養教育に関して、より深化した理論研究と枠組みのデザインとモデルの実験・実践のための拠点形成を目的として活動を進めてゆきます。

最後に西村常任理事から、日吉キャンパスにおける今後の研究・教育活動および創立150年に向けての方針について説明がなされました。

（甲賀崇司）

「教養研究センター選書」の審査結果

「教養研究センター選書」は、教養研究センター所員・研究員の先端的研究活動の一端を、学生や一般読者にわかりやすく紹介するために刊行されています。第3回目の公募となる今年度は、2件の応募がありました。これを受けて、センターでは審査委員会を組織し、厳正な審査を行いました。審査の基準は、「当センター所属の研究者が、その学術研究の成果の一端を紹介することで新鮮な知の一石を投じ、研究・教育相互の活性化をめざそうとするもの」「研究分野は問わないが、学術論文とは異なる啓蒙的な切り口で研究成果を著したもの」という2点です。

その結果、今年度は武藤浩史法学部教授の「『ドラキュラ』から文学入門——血、のみならず、口のすべて」（仮題）が採択されました。文学作品を深層心理学や歴史的観点から読み解くという手法で、学生・一般を問わず読者を引き込む内容となっています。

この選書は3月末に刊行予定ですので、どうかご期待ください。これからも所員の皆様の研究成果を広く社会に発信する企画として、より多くの方々の応募をお待ちしております。

（岩波敦子）

開かれゆくキャンパス5 慶應義塾一貫教育の冒険1 ——平家物語群読会——

小学校から大学までの一貫教育を謳っている慶應義塾が、他にない新たな一貫教育的可能性を見出すために、今回、幼稚舎生から大学生までが協働しながら日本の古典作品『平家物語』を群読します。また、群読の公演後、参加した生徒・学生たちが年齢を超えて交じり合い、自分たちの群読公演とそれに至るプロセスについて活発な議論を行います。

通常（一部のサークル活動などを除き）、年齢的・地理的・組織的隔たりゆえに、交流することが非常に希な塾生たちが、それらの壁を乗り越え、新たな感動教育の形を自ら見出していく本企画は、塾においても画期的な企画となるでしょう。

■内容：

2006年1月29日（日）於幼稚舎

参加する塾生：幼稚舎生、普通部生、志木高生、女子高生、大学生、計約100人

1) 群読会（於自尊館）

開場：13:00 / 開演：13:30 / 終演：14:15

2) 合同ディスカッション（於けやきホール）

開始：14:30 / 終了：15:30

■協力：

速水淳子（志木高等学校）／鈴木秀樹（幼稚舎）／鈴木淑博（普通部）／喜多村隆（女子高等学校）

■お問合せ先・お申し込み先：

教養研究センター：045-566-1151 toiwase-lib@adst.keio.ac.jp
（事前のお申し込みのない場合は、入場をお断りする場合があります）

（熊倉敬聡）

事務局だより

昨年11月の人事異動で、宮木前事務長が湘南藤沢キャンパスに異動となり、その後任として着任しました。同時に、宮坂と甲賀は、研究支援センター職員の兼務を解かれ、教養研究センターの専従職員となり、新たに学術フロント関連の業務を担当する柘植（週4日勤務）が加わったことで、教養研究センターの事務体制は整備と強化が図られました。石川を含めた職員一同、センターにおける研究・教育活動のさらなる発展に寄与できるよう努めていきたいと考えております。

就任して2ヶ月、先生方の熱心な研究活動の下、学生達が自らを見つめ、不透明なこの時代を生きていく力を養う場に関わらせていただくことの重みを痛感しているところです。前職の図書館では「利用者の視点」が不可欠でしたが、新しい職場においても、複眼的な視点を持ち、普遍性と時代性、社会の動きを見据えながら、教養研究センターの職員としてその役割を果たしていきたいと思っております。今後とも教養研究センターへのご支援とご協力を賜りますようお願いいたします。

（吉川智江）

Newsletter

2006. Jan. No.7

慶應義塾大学教養研究センター
Keio Research Center for the Liberal Arts

発行日 2006年1月25日

代表者 横山 千晶

〒223-8521 横浜市港北区日吉4-1-1

TEL 045-563-1111（代表）

Email lib-arts@hc.cc.keio.ac.jp

http://www.hc.keio.ac.jp/lib-arts/